

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380868

研究課題名(和文) 自動的な対人認知の発達に関する比較文化モデルの構築 - 日米の違いの検討 -

研究課題名(英文) The construction of cross-cultural model on the development of automatic person perception: Exploring differences between Japan and U.S.

研究代表者

清水 由紀 (SHIMIZU, Yuki)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30377006

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：意図なく、無意識に生起する自発的特性推論について、世界で初めて異なる文化の参加者を直接的に比較した実証研究を行った。

次の3点を明らかにした。1)日本人と北米人(アメリカ人、カナダ人)のいずれにおいても、自発的特性推論は生起する、2)北米人の方が日本人よりもより自発的推論を生起しやすく自動的である、3)日本人は自発的特性推論と自発的状況推論のいずれも同程度生起するが、北米人は自発的特性推論の方を強く生起する。これらの結果を、思考スタイルや帰属スタイルの違いといった、文化心理学の理論に基づき分析し、自発的特性推論の普遍的特徴と文化固有の特徴に関するモデルを構築した。成果は国際誌に掲載された。

研究成果の概要(英文)：This study investigated cultural variations in spontaneous (unintended and unconscious) trait inference (STI) by comparing Japanese participants with North American participants. Results indicate that 1) STIs occurred among both American and Japanese participants, 2) STIs were more frequent and more automatic among American than among Japanese participants, and 3) North Americans showed more STIs than spontaneous situation inferences (SSIs), whereas Japanese showed both STIs and SSIs equally.

These results were analyzed based on cultural psychological theories such as thinking style and attribution style, and integrated in a theoretical model that depicts the universal and culture-specific natures of STIs. The results were published in some international journals.

研究分野：社会的認知, 文化心理学, 認知発達

キーワード：自発的特性推論 対人認知 自動的課程 統制的課程 認知発達 比較文化

1. 研究開始当初の背景

近年、複雑で高次なプロセスも、実は自動的であることが示されてきている。中でも、意図せず、自動的・自発的に、他者の行動から特性を推論する自発的特性推論 (Spontaneous Trait Inference; STI) は、ステレオタイプや対応バイアスの生起の本質的な説明を提供するものとして、注目を浴びている (Uleman, Saribay, & Gonzalez, 2008)。しかし、子どもでも STI が生じるのか、発達過程でどのようにして自動になっていくのか、といったメカニズムについては、明らかにされてこなかった。

STI の発達過程には文化差が見られる可能性がある。なぜなら、文化心理学の分野では、行動の原因として、欧米圏では内的特性を強調する傾向があり、東アジア圏では外的状況を強調する傾向があることが示されてきたからである (e.g., Nisbett, Peng, Choi, & Norenzayan, 2001)。しかし、STI の生起に関して、アメリカ国内における人種間の比較は行われてきたが、欧米圏と東アジア圏の参加者を直接比較した研究はなされてこなかった。研究代表者は、STI 研究の第一人者であるニューヨーク大学教授の Uleman 氏と共同で、STI の日米比較研究プロジェクトを開始し、日米の差異について明らかにした (Shimizu, Lee, & Uleman, 2013)。しかし、対人認知の発達の比較文化モデル構築のためには、STI のどのようなプロセスにおいて文化差があるのかといった検討がさらに必要であった。

2. 研究の目的

本研究では、同一のパラダイムを用いて、STI の生起に関して日本人とアメリカ人を比較した。それにより、これまで同じく対人認知を扱っていながら、互いに別々に検討を行ってきた発達心理学・社会心理学・文化心理学の知見と方法論を互いに補い、統合し、対人認知の包括的なモデルを提案した。特に次の3点について検討を行った。

検討点(1): 自発的特性推論における自動的過程 vs. 統制的過程の文化差は？
これまで STI は自動的過程によって生起すると想定されてきたが、近年、統制的過程にも影響を受けているという考えが提起されている。そこで、PDP (Process Dissociation Procedure) 分析という方法を用いて、STI の生起を自動的過程と統制的過程に分離し、それぞれへの依存度について推定した。アメリカ人と日本人を対象として誤再認パラダイムを用いた2つの実験を行い、自動的・統制的過程への依存度における文化差を検討した。

検討点(2): 自発的な状況推論 vs. 特性推論の文化差は？
先行研究において、自発的な状況推論 (Spontaneous Situation Inference; SSI) が STI と同時に生起することが報告されてい

る (Ham & Vonk, 2003)。状況に敏感な東アジアの方が、欧米人と比較して状況推論を生じやすい可能性があるが、これまで文化差は検討されていない。そこで、特性と状況のいずれも暗示する行動刺激文を用いて、アメリカ人・日本人を対象とした検討を行い、STI と SSI の同時生起の文化差を検討した。なお、STI と SSI の同時生起に関しては、先行研究が極めて乏しく、その検討は先駆的な試みとなる。したがって、注意深い検討が必要となるため、先行研究において代表的に用いられてきた、誤再認パラダイム、再学習パラダイムのいずれも用いて、2つの実験を行った。

検討点(3): 自動的な対人認知の発達に関する比較文化モデルの構築

自動的過程に依存している程度や、STI と SSI の相対的優位性における文化差、さらにはそれらの文化差の発達の变化についての知見を総合し、自動的な対人認知の文化モデルを構築した。

3. 研究の方法

実験的アプローチにより、STI および SSI の文化差について検討した。先行研究で用いられたものの中で代表的な方法である、誤再認パラダイム、再学習パラダイムを用いた。いずれのパラダイムを用いた場合でも、アメリカ人と日本人を対象とした予備調査により、特性(実験によっては特性と状況)を暗示する行動記述文を選定した。英語で作成し日本語版に翻訳した後、バックトランスレーションを行い、日本語と英語版が同一であることを確認した。

誤再認パラダイム (Figure 1) では、まず、顔写真と行動記述文のペアを提示した。このとき、「彼は几帳面な人で本棚の本をアルファベット順にきちんと並べた」というように特性を明示した Explicit description と、「彼は毎朝 10 分早く仕事場に到着した」というように特性を明示せず暗示するのみの Implicit description の2通りの方法で提示した。ディストラクター課題を挟み、再認課題では顔写真と特性語のペアを提示した。参加者は接触課題で同じ顔写真とペアになっていた行動記述の中に、提示された特性語があったかどうかをできるだけ速く判断するよう求められた。そして、特性語は含まれていなかったが暗示されていた場合に、「あった」と誤再認した場合に、自発的特性推論が生起したと判断した。さらに、PDP 分析により、自動的過程の推定値(A)と統制的過程の推定値(C)を求めた。誤再認率と A・C の文化差を統計的に分析した。

再学習パラダイムでは、接触課題において、特性と状況両方を暗示する行動(あるいは中立文)を、人物の顔写真とペアで提示した。ディストラクター課題の後、学習課題では、顔写真と特性語もしくは状況語のペアを提示した。ペアは接触課題と対応しており、接

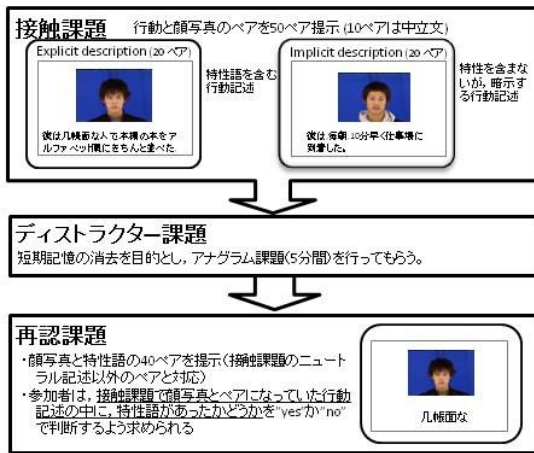


Figure 1 誤再認パラダイムの手続きの流れ

接触課題で同じ写真に対し特性・状況暗示文がペアとなっていたら（かつ接触課題の時点で STI および SSI が生起していたら）再学習となり（再学習条件）、接触課題で中立文がペアとなっていたら初学習となった（統制条件）。最後に、再生課題において顔写真のみを提示し、学習課題においてペアになっていた特性語もしくは状況語を再生してもらった。このとき再生数が「再学習条件 > 統制条件」となれば、自発的に特性推論もしくは状況推論が生起したと解釈した。

4. 研究成果

検討点(1)：自発的特性推論における自動的過程 vs. 統制過程の文化差は？

実験 1 では 63 名の日本人と 59 名のアメリカ人、実験 2 では 50 名の日本人、60 名のヨーロッパ系アメリカ人、58 名のアジア系アメリカ人を対象として、誤再認パラダイムにより STI の文化差を検討した。実験 1 では特性を暗示する行動を 1 つのみ提示したのに対し、実験 2 では 2 つ提示した。また実験 1 はアメリカ人と日本人の比較であったのに対し、実験 2 ではアメリカ人サブグループとして 2 群設定し、3 つの文化グループの比較を行った。

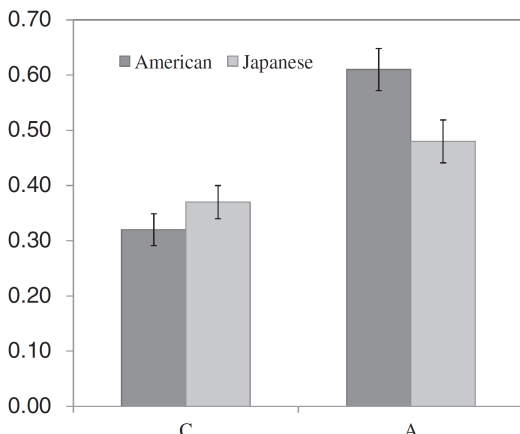


Figure 2 STI における統制過程(C)と自動的過程(A)の文化差 (Shimizu, Lee, & Uleman, 2017)

その結果、次のことが明らかになった。日本人とアメリカ人のいずれにおいても STI は生じた、日本人よりもアメリカ人の方が STI の生起頻度が高かった、統制的过程(C)では日米の差はないが、自動的过程(A)ではアメリカ人の方が大きかった(Figure 2)。すなわち、アメリカ人の方が STI においてより自動的过程に依存している程度が高かった。これらのいずれの点においても、アメリカ人サブグループ間（ヨーロッパ系アメリカ人とアジア系アメリカ人）の違いは見られなかった(Figure 3)。これらの結果から、STI の文化差は、他者の行動を観察した際に自動的に生起する意味生成の過程の違いを反映していることが示唆された。これらの成果は、Uleman 氏との共著論文として、Journal of Experimental Social Psychology に掲載された。

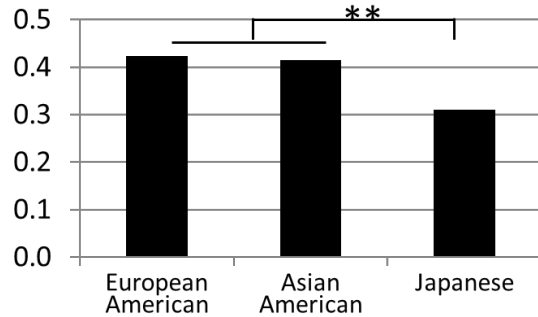


Figure 3 STI の生起の文化差 (Shimizu, Lee, & Uleman, 2017)

検討点(2)：自発的な状況推論 vs. 特性推論の文化差は？

実験 3 では 124 名の日本人と 132 名のヨーロッパ系カナダ人を対象として再学習パラダイムを用いた検討を、実験 4 では 63 名の日本人と 60 名のヨーロッパ系アメリカ人、58 名のアジア系アメリカ人を対象として、誤再認パラダイムを用いた検討を行った。いずれも、特性と状況の両方を暗示する行動記述文および人物・状況の写真を用いた(Figure 4)。



Figure 4 実験 3 の刺激提示例

結果から、日本人と北米人のいずれにおいても STI と自発的状況推論 (Spontaneous Situation Inference; SSI)が生じるが、日本人ではその 2 つが同程度生起するのに対し、北米人では STI の方が SSI よりもより生起しやすいことが示唆された(Figure 5)。さらには、行動観察時に、北米人は人に選択的に注意を向けるのに対し、日本人は人と状況の双方に注

意を向けることが示された。これらの結果は、文化心理学で示されている分析的思考 (analytic thinking) vs. 包括的思考 (holistic thinking) の対比と一致している。成果の一部は、Uleman 氏との共著論文として、*Journal of Cross-Cultural Psychology* に掲載された。

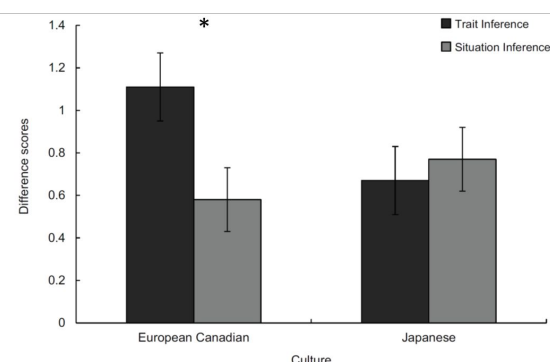


Figure 5 STI と SSI の生起の文化差 (Lee, Shimizu, Masuda, & Uleman, 2017)

検討点(3): 自動的な対人認知の発達に関する比較文化モデルの構築

4 つの実験の成果を統合し、モデルを構築した。他者の行動を見ただけで、意図せず自発的にその人の特性や行動が生じた状況を推論する傾向は、文化によらず普遍的にみられるが、北米ではより「人」に焦点化した推論が自発的に起こりやすいのに対し、日本では「人」と「状況(周辺情報)」のいずれについても自発的に推論しやすいことが示された。これらの結果は、従来文化心理学で論じられてきた、分析的思考 vs 包括的思考などの文化差の枠組みと一致しており、本研究ではそれらの文化による違いが自動的な認知として組み込まれていることを示唆した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

Uleman, J. S., Granot, Y., & Shimizu, Y. (in press) Responsibility: Cognitive fragments and collaborative coherence? *Behavioral and Brain Science*. 査読あり

Lee, H., Shimizu, Y., Masuda, T., & Uleman, J. S. (2017) Cultural differences in spontaneous trait and situation inferences. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 48, 627-643. doi:10.1177/0022022117699279 査読あり

清水由紀 (2017) 相手を思いやる心の発達. *児童心理*, 71, 11-18. 金子書房. 査読無し

Shimizu, Y., Lee, H., & Uleman, J.S. (2017) Culture as automatic processes for making meaning: Spontaneous trait inferences. *Journal of Experimental Social Psychology*, 69, 79-85. doi:10.1016/j.jesp.2016.08.003 査読あり

Lee, H., Shimizu, Y., & Uleman, J.S. (2015) Cultural differences in the automaticity of elemental impression formation. *Social*

Cognition, 33, 1-19.

doi:10.1521/soco.2015.33.1.1 査読あり

清水由紀 (2015) 文化によって異なるパーソナリティ特性理解の発達. *発達*, 144, 27-32. ミネルヴァ書房. 査読無し

清水由紀 (2015) 子どもの社会的発達と「わるくち」. *児童心理*, 11, 11-17. 金子書房. 査読無し

[学会発表](計14件)

Senzaki, S. & Shimizu, Y. (2016) Cross-Cultural Examination of Parents' Expectations for Their Children's Development of Self. Paper Session. *The 23rd Congress of IACCP (International Association for Cross-Cultural Psychology)*. Nagoya, Japan., (2016年8月1日, 名古屋).

Davis, B.R. & Shimizu, Y. (2016) Beliefs about and attitudes toward same-sex desiring men: A culturally-informed experimental mapping method in Japan and the United States. Oral Presentation. *The 31st International Congress of Psychology*. (2016年7月29日, 横浜).

Shimizu, Y. & Senzaki, S. (2016) The role of culture in Japanese and American mothers' social explanations. Presented in the Contributed Symposium "Cognitive development across cultures: The role of parent-child interaction in cultural transmission". *The 31st International Congress of Psychology*, (2016年7月27日, 横浜).

Senzaki, S., & Shimizu, Y. (2016) Story Time Reflects Cross-Cultural Differences in Attentional Patterns in Infancy. Presented in the Contributed Symposium "Cognitive development across cultures: The role of parent-child interaction in cultural transmission". *The 31st International Congress of Psychology* (2016年7月27日, 横浜).

清水由紀・太田拓志 (2016) 乳児は他者の「その人らしさ」を理解しているか? - 特性の安定性の理解の発達 -. *日本発達心理学会第27回大会* (2016年4月30日, 北海道大学)

Shimizu, Y. (2016) The children are psychologists: the developmental processes of understanding others. College of Education, Western Oregon University. Invited lecture. (2016年2月16日, Monmouth, USA.)

Senzaki, S. & Shimizu, Y. (2016). Cross cultural examination of parents' expectations for their children's development of self. Poster Session, *the Annual Pre-Conference for the Advances in Cultural Psychology, Society for Personality and Social Psychology*, (2016年1月28日, San Diego, USA.)

Shimizu, Y., & Senzaki, S. (2015). Cultural differences in the use of trait words in Japanese and American mothers' talk to infants. Poster

Session, the Annual Conference for the British Psychological Society (2015 年 9 月 10 日, Manchester, UK.)

清水由紀 (2015) 「その人らしさ」の推論はどのように発達するか? 日本発達心理学会第 26 回大会シンポジウム「乳幼児期の他者理解の発達」話題提供 (2015 年 3 月 21 日, 東京大学)

中村優樹・清水由紀 (2015) 二次的意図の理解と道徳判断. 日本発達心理学会第 26 回大会ポスター発表 (2015 年 3 月 21 日, 東京大学)

清水由紀 (2015) 児童期・青年期における対人認知の自動性と文化差. 日本発達心理学会第 26 回大会ラウンドテーブル「他者とかわる心の起源と発達」企画・話題提供 (2015 年 3 月 20 日, 東京大学)

Lee, H., Shimizu, Y., Uleman, J.S. & Masuda, T. (2015) Cross-cultural Differences in Spontaneous Trait and Situation Inferences. *16th Annual Meeting of Society for Personality and Social Psychology*, Poster Session. (2015 年 2 月 28 日, Long Beach, USA.)

清水由紀 (2014) 日本人とアメリカ人大学生における特性と状況の自発的推論. 日本心理学会第 78 回大会 (2014 年 9 月 12 日, 同志社大学)

Shimizu, Y. (2014) The children are psychologists: the developmental processes of understanding others. Department of Human Development and Psychology, University of Wisconsin-Green Bay, Invited lecture. (2014 年 4 月 28 日, Green Bay, USA.)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水 由紀 (SHIMIZU, Yuki)
埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：30377006

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()